

# 職員室文化に関する調査研究（3）

林 孝<sup>1</sup>・米沢 崇・藤井 瞳<sup>2</sup>  
(2017年1月5日受理)

## A Survey Study about Shokuinshitsu (Faculty Room) Culture ( III )

Takashi HAYASHI<sup>1</sup>, Takashi YONEZAWA and Hitomi FUJII<sup>2</sup>

The purpose of this paper is to identify the appearance of “Shokuinshitsu (faculty room) culture”, which contributes to the development of competence among faculty members, through an analysis of interviews with one in-service teacher. These interviews were analyzed using SCAT proposed by Otani (2008) on a trial basis.

As a result, the following two situations were identified. 1) “Teacher A” examined the “efforts that had become tradition at the school” and learned the facts regarding the thoughts and expectations of the local community. In addition, through his involvement with children efforts and efforts as a teacher, he tried to reconstitute the meaning of understanding children and collaborating & cooperating with parents. This encouraged him to rebuild his ability as a teacher. 2) “Teacher A” noticed the current state of the “purpose of means” seen in long-standing and worthwhile efforts at “Primary School A”. So, he recalled the values that were important in the day-to-day educational activities that teachers and staff inherited frequently in the schools where he had worked so far. This led him to make proposals contributing to school development engaged in distinctive education unique to “Primary School A”.

**Key words:** Faculty Room Culture, Development of Competence, Tradition and Culture of School

キーワード：職員室文化，教師の力量形成，学校の伝統・文化

### I 問題と目的

本稿の目的は、現職教員を対象としたインタビュー調査の分析を通じて、教師の力量形成に資する「職員室文化」<sup>1)・2)</sup>の様相を明らかにすることである。

我々は、科学研究費補助金 基盤研究 (C)「特色ある開かれた学校づくりに資する職員室文化の発掘と継承に関する研究」(研究課題番号：23531060, 研究代表者：林孝)及び、科学研究費補助金 基盤研究 (C)『職員室文化』の継承による学校づくり推進のための力量形成に関する研究」(研究課題番号：JP15k04299, 研究代表者：林孝)を得て、特色ある開かれた学校づくりに資する職員室文化を検討し、その継承による学校づくりの推進に寄与する教師の力量形成をめぐる継続的に研究してきている。

先行して発表した林他（2015）では、従来の教育経営学で捉えられている組織風土・組織文化の特徴を踏まえ、それらとは異なる「長年それぞれの学校で価値あるものとして大切にされてきた教育技術や思考・行動様式の総体」を「職員室文化」という言葉で捉えることを明らかにした。さらに、小・中学校を対象とした調査研究を実施し、教師としての生き方に最も影響を与えた勤務校でのエピソードの特徴について検討した。その結果、「職員室文化」はそれぞれの学校で脈々と受け継がれて日々の教育活動の中で大切にされてきたことであり、教職員は日々そのことを感じながら、自身のあり方・生き方を鍛錬してきていると考えられる。とりわけ、「職員室文化」が学校づくりにあたって経営目標の設定や具体的な方策に位置づけることができ、それらの「職員室文化」を教職員それぞれは咀

1 広島大学大学院教育学研究科教職開発講座

2 広島大学大学院教育学研究科博士課程後期

嚼し自身と集団の力量向上へと繋げていること、さらに、結果として、教職員の心身の健康に資するものとなることが期待されることを示した。

続く林他（2016）では、勤務校で教職員の力量を向上させるために行っている効果的な取組について、自由記述形式による回答の整理を試み、職員室文化の果たしてきた役割について教職員の力量形成の視点と学校づくりの視点から述べ、教職員の力量形成に資する「職員室文化」の特徴を検討した。その結果、教職員の力量形成の視点から整理すると、勤務校での効果的な取組として、研究授業や校内研修での公開授業の実施やその後の授業検討など教員研修や、学校目標・子供像の共有や各自の学級経営の参観といった学校での組織的な取組、保護者や地域住民と連携・協働した教育活動の展開などをあげることができた。つまり、各校において創意工夫を継続した取組が教職員の力量形成に寄与している。学校づくりの視点から整理すると、学校の一体感を生み出すような研究授業や校内研修、学校での組織的な取組は、教職員の力量形成と同様、学校づくりにも効果的な取組であると指摘できた。それとともに、学校の伝統づくりに地域の伝統・文化の取り入れやその継続的な学校組織の体制づくりの強化、学校の教育力の地域社会への発信なども効果的な取組ということができる。とりわけ、教職員集団づくりに関わる内容領域では、校務分掌や人材配置に工夫をして持続的な人材育成と校内体制づくりを進めていることを明らかにできた。

以上のような学校での効果的な取組が、教職員に自覚化され、その学校ならではの取組として教職員が語るとき、そのような取組は「職員室文化」として教員の力量形成に寄与するとともに学校づくりに貢献する可能性が示唆された。しかし、そのような効果的な取組とは、その学校に同時代を共有した教職員全てにおいて効果的であるのか、また、教職員全てにおいて自覚化されるものであるのか、さらに、時代を超えて共有され続けていくのかなどについての検討が残されている。そこで、調査協力校の現職教員を対象にインタビュー調査を企画し、探索的にインタビューを実施した。本稿では、その現職教員を対象としたインタビュー調査の分析を通じて、教師の力量形成に資する「職員室文化」の具体的な様相を明らかにする。

## Ⅱ 研究の方法

### 1. 調査手続と調査協力者

2016年2月に、公立小学校教員1名（男性、教職経験年数20年目、これまでに6校で勤務、以下、A

教諭と略記）をインタビューーとし、約90分間の半構造化面接法によるインタビューを実施した。

A教諭をインタビューーとして選定したのは、教師の力量形成に資する「職員室文化」の具体的な様相を明らかにするという目的に照らして、経験年数が比較的長いベテラン教員で、かつ複数の学校で勤務した経験を有していることが重要であると考えたからである。なお、インタビュー実施前には、本人及び所属長に書面による研究参加の承諾を得ている。

インタビューでは、教師の力量形成に資する「職員室文化」の具体的な様相を明らかにするために、①これまでの教職生活を通じて、先輩や同僚の先生から、教育技術をどのような形で学んだのか、②これまでの勤務校において、「その学校ならではの」と言えるような、長期にわたって行っている取組の中で、教職員が力量を向上させるために効果的であったと思ったことについて尋ねた。

### 2. データの分析方法

調査によって得られた質的データは、大谷（2008）が提案したSCAT（Steps for Cording and Theorization）を試行的に用いて分析する。大谷（2008；2011）によれば、SCATは質的データ分析手法の1つであり、比較的小規模のデータにも適用できるとされる。さらに、分析手順や分析過程が明示化・可視化されていることから、分析結果の客観性・反証可能性も担保することができると考えられる。SCATによる分析手順は以下の通りである（図1）。

- ① 所定のSCATフォームのテキスト欄にセグメント化したデータをテキストとして記入する。
- ② そのセグメントごとに、1ステップでは「〈1〉テキスト中の注目すべき語句」を書き出す。
- ③ 2ステップでは「〈2〉〈1〉の語句を言いかえたデータ外の語句」を記述する。
- ④ 3ステップでは「〈3〉〈2〉を説明するようなテキスト外概念」を記述する。
- ⑤ 4ステップでは前後や全体の文脈を考慮して「〈4〉〈3〉から浮かび上がるテーマ・構成概念」を記述する。
- ⑥ 疑問点・追究してみたい点があれば、必要に応じて「〈5〉疑問・課題」を記述する。

以上4つのステップによるコーディングの後、〈4〉のテーマ・構成概念を紡いでストーリーラインを記述し、ストーリーラインを断片化することによって、理論記述（このデータから言えること）を記入する。さ

らに、課題や追究すべき点についても記述する。

### Ⅲ 結果と考察

本章では、インタビュー調査によって収集したデータを基に、教師の力量形成に資する「職員室文化」の具体的な様相について考察する。ここで分析考察の対象として取り上げたデータは、A 教諭が 5 校目に赴任した X 町立 A 小学校の部分である。複数の学校で勤務した経験を有し、A 小学校についての経験を相対化することができるなかで、A 小学校における「学校のもつ条件性」<sup>3)</sup>を踏まえた特色ある教育・特色ある学校づくりとしての「職員室文化」との出会いにおける力量形成をめぐる、SCAT によるコーディング後のストーリーラインから検討していく。

A 教諭は、5 校目の A 小学校での勤務を通じて、小規模校であるといった学校のもつ条件性を生かした、自転車競技大会や剣道といった特色ある教育・特色ある学校づくりを経験し、学校の施設・設備の充実や学校の伝統・文化を実感している。

自転車競技大会の指導（家庭学習の推進とその対応を含む）に携わる中で、これら特色ある教育・特色ある学校づくりが学校の統廃合による伝統・文化の継承を経て、親世代から続く継続的な取組、駐在所さんや外部講師といった地域の教育力の高さを実感している。

さらに、A 教諭自身の学びが生起し、自転車競技大会にかかわる専門的知識や専門的技能、指導のコツを体得していった。そこには、指導に携わらずにおれない学校の独特の雰囲気の影響により、小規模校における指導の困難さを感じつつ、指導をする決意があった。ただし、専門的な知識や技能については、時間の経過による忘却がみられる。しかしながら、先輩教員や同僚教員に教えてもらう経験、それを新しく来られた教員に伝える経験は A 教諭の意識に色濃く残っている。

自転車競技大会の指導経験を通して、A 教諭は特色ある教育・特色ある学校づくりによる成果を獲得するだけでなく、子どもの効力感の高揚を実感し、かわりを通じた子どもからの学びにより、子どもとの距離感が縮まる経験をし、子ども理解に関する力量形成において改めて見直し再構成する契機となっている。教育活動へのフィードバックも行われている。さらに、保護者との距離感が縮まる経験もあり、保護者との関係づくりへの契機となっている。

一方で、A 教諭は、A 小学校での特色ある教育・特色ある学校づくりが学校の伝統・文化として根付く中

で、努力の積み重ねによる人間形成といった本質的な教育目標の無自覚化が起こり、「やらなければいけないからやる」といったような手段の目的化が生じたと述べている。この手段の目的化によるマンネリ化が教職員のモチベーションの低下にも繋がった。

そのような中、A 教諭は、伝統の価値を再確認しつつも、目的を再確認し、教育目標を意識した指導の重要性や本質的な目標・体現すべき価値の再確認の必要性を指摘している。

そこで、A 教諭はマンネリ化の改善を提案している。その際、提案方法を工夫し、先輩から学んだことを伝承するなど、バックグラウンドに基づく改善やエビデンスベースに基づく改善を図っている。これには、「僕はクラッシュ・アンド・ビルドが好きなんで」と語っているように、弛まぬ改善の姿勢という自身の性格が影響していると自己分析している。

このような自身の行動が、教員の意識改革に繋がり、教職員の自覚による指導の変化も生じると信じている。さらに、これまでの教職経験や勤務校の伝統を継承することで、学校を超えた伝統・文化の伝播が起こっていくとも考えている。

以上のストーリーラインから、A 小学校における特色ある教育・特色ある学校づくりとしての「職員室文化」との出会いが力量形成の契機となったと考えられる。具体的には、「職員室文化」にかかる保護者・子ども・同僚・地域住民との出会いを通じての子ども理解及び保護者との連携・協働に関する力量の形成や、地域の教育力の実感、先輩教員・同僚教員との協働である。

その一方、手段として取り組むこととなった「職員室文化」との出会いによって教育目標の無自覚さや教育活動のマンネリ化といったネガティブな側面に直面する。それを契機に、目標として価値ある取組につながる「職員室文化」との出会いによる弛まぬ改善に取り組むことになる。このことが、5 校目の所属校と前任校までの「職員室文化」の経験の伝播にみられる、学校づくりにつながる力量形成の萌芽と考えられる。

図1 教師の力量形成に資する「職員室文化」に関するインタビュー

[illegible]



席号	発言者	テキスト	(1) テキスト中の注目すべき語句	(2) テキスト中の語句の違い・なし	(3) テキスト外への概念	(4) テーマ・構成概念	(5) 疑問・課題	
36	聴き手	子どもとの距離は縮まりますね。	子どもとの距離は縮まりますね。	子どもとの距離感	子どもとの信頼関係の形成(結果)	子どもとの距離感が縮まる経験		
37	聴き手	それがですね。授業とかの中にも生きてくるんですか。						
38	教諭	やっぱ、長い時間一緒に過ごしているということと、それだけやりとり子ども理解につながっているというののもうまいところ、いいところやっぱそこで見つけられるし、課題は決まっているし、そういう意味では、授業を通じてっていいと思います。	長い時間一緒に過ごしているということと、それだけやりとり子ども理解につながっているというののもうまいところ、いいところやっぱそこで見つけられるし、課題は決まっているし、そういう意味では、授業を通じてっていいと思います。	長期間のかわり子ども理解よい点と課題点の発見	長期間のかわり(要因)子ども理解の深化(結果)子ども理解の力形成へのフィードバック(影響)	子ども理解に関する力形成教育活動へのフィードバック(影響)		
39	教諭	保護者との関係で言えば、どうかわかんません。ただ、そこまう、すぐで子供と保護者でちゃんと信頼関係が築いていまして、そういう話にはつながってきく、というの意味では、そこまでは、家庭訪問に行ったときから、ふだん会ったときに、「いや、さうかも信頼関係が築いていまして」というようふたつが話にはなっていましたね。	保護者との関係話にはつながってきく家庭訪問へ行ったときからふだん会ったときに「いや、さうかも信頼関係が築いていまして」というようふたつが話にはなっていましたね。	保護者との信頼関係子どもと保護者との関係作り家庭訪問	保護者との信頼関係の構築子どもと保護者との関係づくりのヒントの獲得(要因)	保護者との信頼関係の構築保護者との関係づくりへの契機		
40	聴き手	子ども自身の成長によって、そういうふうに取り組んでいける、例え自転車から自転車、あるいは側面から側面にも取り組んでいけることは、子ども自身自身の成長にも、やっぱりその学校は大事に考えているんですね。						
41	教諭	そうですね、自転車の技術を高めようというところじゃないですか、そうやって、何かついていけるように、その目標に向かって努力していく、努力を重ねていく、そういうところで人間形成というものを図っていくということじゃないかなと思うんで大丈夫です。	自転車の技術を高めようというところじゃないですか、そうやって、何かついていけるように、その目標に向かって努力していく、努力を重ねていく、そういうところで人間形成というものを図っていくということじゃないかなと思うんで大丈夫です。	自転車設定人間形成	単なる技術の習得ではなく、目標設定し、目標達成に向けた努力の力(影響)それを越えた人間形成(結果)	努力の積み重ねによる人間形成		
42	聴き手	そういうことは、先生方で語るということはあるんですが、子どもも具体的な成長を通じて、あまり目覚めないので、						
43	教諭	僕が行ったときは、あまり目覚めしていませんでした。	あまり目覚めしていません	無自覚		目標が自覚されていないという点(結果)	目標の無自覚化	
44	教諭	なので、僕としては何のためにやるんだと、やっぱ目標から入ってかかっていて、目標は全国大会出場が目標になったとすると、子どももそういう成長を期待してこの活動を取り組むかというのを全体計画の中に位置づけようというところで、一応、提案はしたもしたんですが、	目標は全国大会出場が目標になったとすると、子どももそういう成長を期待してこの活動を取り組むかというのを全体計画の中に位置づけようというところで、一応、提案はしたもしたんですが、	目標のすり替え全国大会の目標の捉えなし学校の伝統の本質的価値の認識	学校の目的性(結果)本質的な目標を確認することの必要性(結果)	手段の目的性(結果)手段の目的確認		
45	教諭	子どもたちも、一応、確率は交通安全子どもと自転車教員という、なので、交通安全、つまり、みんなに安全がなかったら、安全にこれから生きていくという大切なスキルなんだからいかに安全意識を育てようというところ、	交通安全意識を育てようというところ、	安全意識を育てようというところ、	安全意識を育てようというところ、	安全意識を育てようというところ、	安全意識を育てようというところ、	
46	聴き手	代々続くというから、いろんな価値観が重なっている中で、交通安全そのものというのは、ちょっとこの話に引っかかっているような感じだ、そういうことというものは忘れがちな、何のためにやっているんだろうかと、そういう感じは持ちます。						
47	教諭	そうですね、多分、それは子どもというよりも、多分、教師サイドの問題なんじゃないですか、やっぱ何のためにやっているか、教育活動の目的や価値の考えかたが、教師自身に何を目指してやって、そのためにどういうふうな計画を組んでいくのかというところをしっかりとしないと、教育活動って正確には伝わりません。	教師サイドの問題教師は意図的価値の伝承教育活動に価値をもちやうか	教員の意識の問題学校教育目標の明確化学校教育目標の明確化	教員のマンネリ化(要因)学校教育目標を達成する学校経営という視点(結果)	手段の目的性によるマンネリ化(結果)手段の目的性による教員の意識や教育活動のマンネリ化の課題		
48	教諭	というところ、ちょっと自分、1年目からちょっとどうなろうかなと、どうなろうかなというところは提案したいんですが、	どうなろうかなと、どうなろうかなというところは提案したいんですが、	改善に向けた提案	マンネリ化を改善する提案(結果)	マンネリ化の改善の提案		
49	聴き手	そうですね、そこまは行かんかったんですけど、そういう意識でやっていると、自分自身でどうなろうかなというところ、	そこまは行かんかったんですけど、そういう意識でやっていると、自分自身でどうなろうかなというところ、	具体的な改善には至らない教員の意識の改革	教員の意識改革(結果)	伝統の価値の再確認教員の意識改革		
50	教諭	ありがとて、そうですね。うーん、1点、一番最後のほうで話した、交通安全という、寄を連ねての中で、その起上りたところでは、全国大会に出るということが目的という目標みたいなものになっていて、本来、何のためにやっているかという意識が教育活動の中で起上っているというところ、自分自身は感じて、そこを少し聞かせるようにしたいとおっしゃってます。						
51	聴き手	このそのエピソードなのかどうかわかんないですが、先生が自分がこれまで培ってきたものと考え方というものを、もしもしたら前任教の何かを受けて、先輩後輩の何かを受けてもあってもいいんですが、この学んでまたそこらから次の学校に一番伝えたい、今まで培ってきたものをこの学校には伝えていったというの、一番これはそういうことじゃないかなというエピソードがあれば、先生のところで、やっぱそういう一番そういうことかなと伝えたいんですけど、ほかにもしもそういふ、今までの自分の考え、あるいは前の学校とか先輩とかそういうことであって、自分自身はそれと違うかと思ってるんだと、						
52	聴き手	そうですね、そういうエピソードというところを言っても、たっはって出てくるんではないですけど、ちょっと考えを深めていっていただくだけでもいいんですけど、僕の基本的スタンスって、あんまり同じことを繰り返して好きじゃないんですよ。	僕の基本的スタンスあんまり同じことを繰り返して好きじゃないんですよ。	絶えず改善していくという基本的スタンス	絶えず改善していく姿勢(特性)	地味な改善の姿勢		
53	教諭	1年目はそこまでではないですけど、目を磨いていなるように、何らかのきっかけでやるのが、もう一つ、何らかのきっかけでやるのが、もう一つ、何らかのきっかけでやるのが、						
54	教諭	そうですね、そうですね。うーん、1点、一番最後のほうで話した、交通安全という、寄を連ねての中で、その起上りたところでは、全国大会に出るということが目的という目標みたいなものになっていて、本来、何のためにやっているかという意識が教育活動の中で起上っているというところ、自分自身は感じて、そこを少し聞かせるようにしたいとおっしゃってます。						
55	教諭	そうですね、そうですね。うーん、1点、一番最後のほうで話した、交通安全という、寄を連ねての中で、その起上りたところでは、全国大会に出るということが目的という目標みたいなものになっていて、本来、何のためにやっているかという意識が教育活動の中で起上っているというところ、自分自身は感じて、そこを少し聞かせるようにしたいとおっしゃってます。						
56	教諭	そうですね、そうですね。うーん、1点、一番最後のほうで話した、交通安全という、寄を連ねての中で、その起上りたところでは、全国大会に出るということが目的という目標みたいなものになっていて、本来、何のためにやっているかという意識が教育活動の中で起上っているというところ、自分自身は感じて、そこを少し聞かせるようにしたいとおっしゃってます。						
57	教諭	そうですね、そうですね。うーん、1点、一番最後のほうで話した、交通安全という、寄を連ねての中で、その起上りたところでは、全国大会に出るということが目的という目標みたいなものになっていて、本来、何のためにやっているかという意識が教育活動の中で起上っているというところ、自分自身は感じて、そこを少し聞かせるようにしたいとおっしゃってます。						
58	教諭	そうですね、そうですね。うーん、1点、一番最後のほうで話した、交通安全という、寄を連ねての中で、その起上りたところでは、全国大会に出るということが目的という目標みたいなものになっていて、本来、何のためにやっているかという意識が教育活動の中で起上っているというところ、自分自身は感じて、そこを少し聞かせるようにしたいとおっしゃってます。						
59	教諭	そうですね、そうですね。うーん、1点、一番最後のほうで話した、交通安全という、寄を連ねての中で、その起上りたところでは、全国大会に出るということが目的という目標みたいなものになっていて、本来、何のためにやっているかという意識が教育活動の中で起上っているというところ、自分自身は感じて、そこを少し聞かせるようにしたいとおっしゃってます。						
60	聴き手	それは、過去の経験というか、自分自身の性格という特徴というか、ものがあるから、要するに、何か経験とスキルでやっていると、なかなか感じがあるんです。						
61	教諭	そうですね、そうですね。うーん、1点、一番最後のほうで話した、交通安全という、寄を連ねての中で、その起上りたところでは、全国大会に出るということが目的という目標みたいなものになっていて、本来、何のためにやっているかという意識が教育活動の中で起上っているというところ、自分自身は感じて、そこを少し聞かせるようにしたいとおっしゃってます。						
62	教諭	そうですね、そうですね。うーん、1点、一番最後のほうで話した、交通安全という、寄を連ねての中で、その起上りたところでは、全国大会に出るということが目的という目標みたいなものになっていて、本来、何のためにやっているかという意識が教育活動の中で起上っているというところ、自分自身は感じて、そこを少し聞かせるようにしたいとおっしゃってます。						
63	教諭	そうですね、そうですね。うーん、1点、一番最後のほうで話した、交通安全という、寄を連ねての中で、その起上りたところでは、全国大会に出るということが目的という目標みたいなものになっていて、本来、何のためにやっているかという意識が教育活動の中で起上っているというところ、自分自身は感じて、そこを少し聞かせるようにしたいとおっしゃってます。						

図1 教師の力量形成に資する「職員室文化」に関するインタビュー（続き）

[illegible]

#### IV まとめと今後の展望

本稿の目的は、現職教員を対象としたインタビュー調査の分析を通じて、教師の力量形成に資する「職員室文化」の様相を明らかにすることであった。A 教諭における A 小学校の「職員室文化」との出会いから、その様相を素描することによって、まとめを述べたい。

5 校目に赴任した A 小学校において、A 教諭は、この学校の「職員室文化」に出会うことによって、A 小学校の伝統となった継続的な取組にみられる大切にされてきた価値を同定し、それを受け止め、その取組に献身する経験をしているのである。すなわち、「親の世代から続く学校の伝統となった取組」に向き合うことによって、地域の人々の思いや期待の内実に触れるとともに、それに取り組む児童との関わりや教師としての取組を通じて、子ども理解や保護者との連携・協働の意味の再構成が図られ、さらなる力量形成の契機を得て、力量の再構築を図っているのである。

また、その中にあって、これまでの勤務校それぞれで脈々と受け継がれて日々の教育活動の中で大切にされてきた価値を想起し、A小学校における長年の価値ある取組にみられる「手段の目的化」の現状に気づく

なかで、A 小学校ならではの特色ある教育に取り組む学校づくりに資する提案を行おうとしていた。ここには、教職員の異動を通じて各学校に伝播すると仮説的に捉えた「職員室文化」の教職員に与える影響の存在を指摘することもできるであろう。

以上を踏まえると、赴任校における「職員室文化」との出会い、すなわち、目標として価値ある取組につながる「職員室文化」や手段として取り組むこととなった「職員室文化」との出会いによって、それへの取組の中でその学校や地域ならではの大切にされてきた価値を日々感じながら、自身のあり方や生き方を鍛錬してきたと考えられる。換言するならば、勤務校の「学校のもつ条件性」という良さを生かしながら長年行ってきた教育活動に象徴される「職員室文化」が継承されることとなり、結果として、そこに実感される勤務校の価値ある取組を教職員それぞれは咀嚼し自分の力量向上へと繋げて行くことができたといえるであろう。

さて、本稿では、調査協力校の現職教員1名を対象にインタビュー調査を企画し、探索的にインタビューを実施した調査結果の分析を通じて、教師の力量形成に資する「職員室文化」の具体的な様相を明らかにす

るよう努めた。ここで示された「職員室文化」としての効果的な取組とは、その学校に同時代を共有した教職員全てにおいて効果的であるのか、また、教職員全てにおいて自覚化されるものであるのか、さらに、時代を超えて共有され続けていくのかなどについての検討は、今後の課題として残されている。今後においては、対象者を増やして、学校のもつ条件性にみられる多様性にも着目し「職員室文化」の具体を検討するとともに、「職員室文化」のもつ特色ある学校づくりや教師の力量形成に対する機能について検討していきたい。

## 注

- 1) 「職員室文化」の用語については、執筆者の林が東広島市教育委員会策定の「第三次学校教育レベルアッププラン」(平成 22～25 年度)における「職員室文化創造調査研究」の協力者として関わったことから、その着想を得ている。

東広島市教育委員会「職員室文化創造調査研究」では、最終的に「教職員が心身ともに健康で、教職への意欲とやりがいとを共有し、専門職的能力を高め合う、人間関係、雰囲気醸成させる職員室を中心とした文化」と定義して検討された。いわば、職員室という「場」を教職員にとっての限定的な居室とし、その「場」における教職員の関わりを通じて学校組織力の向上、教員の力量形成やメンタルヘルスの充実などを目指すものといえる。本研究では、「職員室文化」を「長年それぞれの学校で価値あるものとして大切にされてきた教育技術や思考・行動様式の総体」と定義し、そのような「職員室を中心とした文化」の内実とその機能や活用のあり方をめぐって明らかにしようとしている点で区別できる。

なお、東広島市教育委員会「職員室文化創造調査研究」では、①学校組織向上(人材育成)に資する職員室文化創造、②教職員個々の力量形成に資する職員室文化創造、③教職員の心身の健康に資する職員室文化創造、及び④学校に根付く文化醸成に資する職員室文化創造という、4 点の事業が事業推進の方向性として示されている(東広島市教育委員会「東広島市職員室文化創造調査事業『職員室文化創造に関する調査』結果」2014 年 3 月 31 日)。これらの事業推進の方向性として示される期待される成果は、本研究において「職員室文化の可能性」として論述するように、我々は学校教育の推進に果たす「職員室文化」の機能とし

て捉えているものである。

- 2) 「職員室」という用語は、明治期以来の日本の小学校や中学校において、教職員の居室として授業の準備や会議などが行われてきた部屋を指す用語である。そのような職員室を居室の意味においても捉えるものの、本研究においては、教職員にとって職場である学校という「場」を指す際の「象徴的な場」としても捉えて「職員室」という用語を用いている。この「職員室」について、田浦勝次は「教師が児童生徒の教育について、それぞれ専門職に必要な共通理解を深め、学校運営の適正とその円滑を図る民主的な話し合いの場である。いいかえれば職員室は教育室であり、教育活動の中心室である。」と述べている。続けて、そうした教育的意義からみて、「①校務処理する室、②会議をする室、③研究や修養をする室、④休息や休憩をする室としての四つの機能」の必要性を指摘している(田浦, 1974)。我々はこのような「職員室」を、教職員にとって職場である学校という「場」を指す際の象徴的な「場」として捉えている。というのも、教職員同士が学校組織の一員として教育活動に邁進する際の緊密な関わり合いを持つことになるのは、その多くが「職員室」という「場」と考えられるからである。
- 3) 「学校のもつ条件性」とは、「学校経営における経営条件として考慮すべき、各学校の有する人的・物的・財的な教育資源や所在する地域の特性等のことであり、これらには差異があり、また、有限であることを意味(林, 2009, 123 頁)」するものである。

本研究において「長年それぞれの学校で価値あるものとして大切にされてきた教育技術や思考・行動様式の総体」と定義した「職員室文化」は、「学校の伝統」を築いていく中で、「地域とともにある学校」として各学校の置かれた状況と密接に関わる、すなわち「学校のもつ条件性」を規定因としていえると考えられる。したがって、「職員室文化」の検討にあたっては「学校のもつ条件性」との関連を明らかにすることが不可欠とされると思われる。

## 引用・参考文献

- 土井徹「円滑な学びのつながりをめざす小学校・中学校の理科指導方略の研究」『広島大学大学院教育学研究科学位論文』, 2016 年。
- 林孝「学校の組織風土・組織文化に関する考察～教諭

の組織風土イメージを中心に〜』『広島大学学校教育学部紀要』第1部第16巻, 1994年, 111-125頁。

林孝「学校評価・教員評価による学校経営の自律化の可能性と限界」『日本教育経営学会紀要』第48号, 2006年, 16-27頁。

林孝『『特色ある開かれた学校づくり』に学校評価を生かす』岡東壽隆監修『教育経営学の視点から教師・組織・地域・実践を考える』北大路書房, 2009年, 122-132頁。

林孝「学校と地域の連携に関する校長のマネジメント」『日本教育経営学会紀要』第54号, 2012年, 35-45頁。

林孝・米沢崇・周蘭君・川原陽子「職員室文化に関する調査研究(1)」『学習開発学研究』第8号, 2015年, 49-58頁。

林孝・米沢崇・周蘭君・川原陽子「職員室文化に関する調査研究(2)」『学習開発学研究』第9号, 2016年, 143-150頁。

稲垣忠彦・久富善之編『日本の教師文化』東京大学出版会, 1994年。

岡東壽隆・福本昌之編『学校の組織文化とリーダーシップ』多賀出版, 2000年。

大谷尚「4ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案-着しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き-」『名古屋大学大

学院教育発達科学研究科紀要』第54巻第2号, 2008年, 27-44頁。

大谷尚「SCAT: Steps for Cording and Theorization—明示的手続きで着しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法—」『感性工学』第10巻第3号, 2011年, 155-160頁。

田浦勝次「職員室」海後宗臣・村上俊亮・細谷俊夫監修『教育経営事典第3巻』帝国地方行政学会, 1974年, 456頁。

## 付記

本稿は, 2016年6月12日に開催された日本教育経営学会第56回大会で発表した内容を加筆・修正したものである。

なお, 本研究は, 科学研究費補助金 基盤研究(C)「特色ある開かれた学校づくりに資する職員室文化の発掘と継承に関する研究」(研究課題番号: JP 23531060, 研究代表者: 林孝), 科学研究費補助金 基盤研究(C)『『職員室文化』の継承による学校づくり推進のための力量形成に関する研究」(研究課題番号: JP 15k04299, 研究代表者: 林孝)の継続的な研究成果の一部である。

最後に, ご多忙の中, インタビュー調査にご協力いただきましたA教諭に厚くお礼申し上げます。